アルカイド・クラッチ　――引き篭もり猟犬――

天生 都馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アルカイド・クラッチ　――引き篭もり猟犬――

【Ｎコード】
Ｎ６０９９Ｏ

【作者名】
天生　都馬

【あらすじ】
どこにでもあるような、小さな田舎町の郊外。深い森の奥には魔女が棲む館があると噂されている。
血を吸わない吸血鬼。外界を恐れる殺人鬼。全知の魔法使い。
小さな町に行き交う様々な噂。
その原点にあるは人。
呼称は関係ない。鬼憑き、悪魔憑き、お化け怪物。そんなもの、知らないだけで幾らでも在る。
小さな町の、多くの出来事。

伝奇ファンタジー、アルカイド・クラッチ――

序章（前書き）

◆

伝奇、というのは初めてなのでちゃんと伝奇になっているか不安ですが、精一杯の力を込めて書きあげます。

序章

夜が深まればいいと、君は言った。
目に見えるものは希薄で、感覚さえ閉ざされて。
そうして何も考えずに消えていければどれだけ楽だろう、と。
君は言う。
「貴方に人は殺せない」と。
僕は言う。
「彼女は僕が殺したよ」と。
繰り返し、繰り返し。
言い聞かせるように。
赦しを乞う事さえ、僕は自分に許さない。
けれど、君は僕を赦すと澄み切った瞳で僕を見つめる。
そこに偽りはなく、あるのはただ、置いてけぼりを喰らって今にも泣き出しそうな、少年の姿だけだった。
返り血に塗れた頬に、君は優しく手を伸ばす。
渇ききった肌を撫でる温もりは、ただひたすらに優しくて。
僕は、罪を忘れて涙した。
これが最後。僕の、人らしい心の、走馬灯。
右手に固く握られたナイフは、いつしか音を立てて地面を転がり血を流す。
忘れないように。強く強く左腕を掴み握り締める。
しばらくして頬を離れた優しさを最後に、僕は自分を殺した。

夜が深まればいいと、君は言った。
罪も、懺悔も後悔も、すべてを忘れて消えていければいいのにと、言葉を重ねる。
なんて、優しさ。
痛いくらいに、温かい言葉。

突き刺すように、甘い誘惑。
それでも僕は、夜明けを望んだ。
たとえ夜の闇が世界を覆い尽くそうとも、僕は朝を望む。
醜くても、汚くても。
誰かを傷つけると知っていながらも、僕はこの、傷だらけの惨めな姿を晒すために朝を待つ。　明るい白日の下、永久に彼女を探し続ける。

引き篭もり猟犬――

覚醒を促す陽光に眉間を歪めながら、館の主はまどろみ続ける。
夏も間近というのに相変わらず日の出は早く、一面を窓に仕切られた建築基準法も度外視の館の一室は朝から既に真昼のような明るさだった。
どこのお姫様が寝ているんだと見ている者に疑問を持たせるような豪奢なベットも、備え付けられた天蓋も、その奥で寝続ける主とは滑稽なほどに不似合いだった。
そもそも、朝が眩しいからと唐突に取り寄せた天蓋だってこの部屋ではまったく用を成さないというのは分かり切ったことだったのだ。主の趣味なのかもともとそうだったのかは知らないが、壁はおろか天井でさえガラス張りなのだ。布切れ一枚（正確にはレース状で幾重にもなっているものだが）でどうにかなる問題ではない。
部屋に似合わないこのベットも、無駄にでかい木製の扉も、この館はあまりに混沌とし過ぎている。あのメイド兼執事のような大女もよく文句を言わないものだ。
あらん限りの悪態を内心でつき怒りもひと段落したのか、客人で

あるアリシアは諦めたように天蓋に手を掛け、思い切り開け放った。
本当に、溜息が出る。夜遅くに仕事があるから朝起こしに来いと迷惑な電話を寄こし、有無を言わさず話すだけ話して後は電源が入っていないか……である。
普通そういうのは起きて待っているけど、万が一寝坊したら起こしてね、程度の意味合いで言う台詞だろう。常識的に考えて。
だというのに当の本人は鬱陶しそうに顔を歪め、枕に埋めて寝なおすという体たらく。本当に、人を小馬鹿にした奴だとつくづく思う。
傍目から見れば良いとこのお嬢様といった容姿で、腰にまで届く、漆に浸したような髪や切れ長の大きい目。血色のいいやたら色っぽい唇や筋の通った鼻筋と女のアリシアから見ても惚れ惚れするような美少女っぷりである。
だというのに、この和洋折衷なんでもござれな節操無い館の主は、真実真に男であり、自分は図らずしも殿方の寝室で百面相の始末。こんな光景をあの大女に見られたらどんなに鬱陶しく言い寄られることやら。
明確に浮かぶ近い将来のビジョンに辟易しながら、アリシアは覚悟を決めて真っ黒の寝巻に身を包んだ主の身体に手を掛けた。
「九重（ここのえ）さぁん、朝ですよぉ、起きてくださぁい」
間延びした、やけに間抜けな猫なで声は本来の彼女の話し方ではなく、朝限定の目の前で寝続ける男、九重に対する為だけに開発した秘密兵器であった。
案の定、男は揺すられていた身をビクッと震わせ、それっきりまるで動かなくなった。
どうにもこの男はこういう猫なで声というものに思う所があるらしく、これだけに反応するもとい、これ以外にはまったくの反応を示さないのである。
「なんだ、アリスか」
暫くしてさも残念そうな顔を上げてアリシアを一瞥すると、九重

はぼふっと音を立てて再び枕に顔を埋める。
「こ、九重さん！　起きて下さい！」
慌ててこれでもかというくらいに男の身体を揺すり始め、アリシアは鼻息荒くがなり立てる。
「分かってる、今起きるから。とりあえず皐月（さつき）を呼んで来てくれ」
絶対起きて下さいよ、とアリシアは念を押してから膝を着いていたベットから立ち上がり、天蓋の外に出る。すると、件の女性が今来た所ですと言いたげな澄ました微笑を浮かべて入り口近くに立ち控えていた。
「御苦労様です、アリシア様。主様に手荒なことをすることに掛けては貴方に比肩する者はいませんから、非常に助かります」
メイド兼執事のような者、もとい皐月は厭味ったらしく口角を上げてアリシアに頭を下げる。　どうにもこの大女は自身の主が得体の知れない女に気を許しているのが気に食わないらしく、アリシアに対しては妙に突っかかって来るのだ。
聞いた所によると、どうやらこの大女は九重の古い知人から奉公に出されているらしく、その忠誠心は本来その知人に向けられているモノらしい。要するに、私の主の知人である九重様も忠誠に値する方です、ということだ。
とは言われても皐月の異常なまでの忠誠心は、ひょっとして九重さんが、とアリシアが勘ぐってしまうのも仕方ない程のもので、これがその古い知人が相手だったらどうなるのやらとアリシアは密かに危惧していた。
「お、早いじゃないか皐月」
大きな欠伸を欠きながら天蓋の奥から九重が姿を現す。先程までは割とボサボサだった長髪も短い間で綺麗に直されており、きっと馬鹿高い寝ぐせ直しを使っているに違いないとアリシアはどこか外れた感銘を受ける。
「いいえ主様。アリシア様がお急ぎでお呼びに来られたものですから」

ふん、と皐月は横目でアリシアに視線を向ける。白々しい嘘の上にこれかよと内心舌を打つアリシア。どう足掻いても相容れない、犬猿の仲であることを再確認する。
「あぁ、やめろやめろ。朝っぱらから醜い喧嘩すんなよな」
失礼しましたと恭しく頭を下げる皐月を横目に、アリシアは怒られてやんのと嘲笑する。
「おまえもだっつーの。まったくうちの女どもは」
「うちの女扱いしないで下さい！」
アリシアが間髪入れず反応する。形式上客人扱いとされてはいるが、まるで自分の女とも言わんとする九重の対応には敏感なのだった。
「はいはい。そんな瑣末なことより、今日は仕事だ。気は乗らないが、おまえの主人の依頼とあっては断れん」
そう言って九重は皐月に目配らせして、部屋の片隅に置かれたデスクの上から一枚の紙を取ってアリシアに投げ渡す。
「マスターからですか？　それは珍しいですね」
皐月は覗き込むようにしてアリシアの手元にある書面に目を通し、懐かしそうに目を細める。
「綺麗な字。今時手紙って珍しいね」
「マスターは古風な人ですから」
内容はさておき、文面は非常に丁寧な字で書き連ねられており、携帯世代であるアリシアは物珍しそうに手紙を眺める。
「なに言ってんだ、それは俺の走り書きだよ。あいつからは直接電話が来たんだ。一応一語一句逃さず書き取っておいた」
九重さんの字かい、と盛大に突っ込んで思わず放り投げられた走り書きを皐月がすかさずキャッチする。
「内容は、楽しいものではありませんね。殺人鬼の保護或いは制圧、場合によっては殺害もやむなし。個人に対して制圧とは、物々しいです」
「どうにも一度拘束されたらしいが三日前に逃亡したと思われてる。

ニュースでやってなかったか？」
今朝部屋で見たニュースで再び犠牲者が出たとアナウンサーが神妙な顔で話していたのを思い出す。
「確か、死因は首筋を刃物でバッサリ、でしたよね？」
「はい。今のところ被害者に共通性がないことから行きずりの愉快犯ということになっていますが」
アリシアの言葉に皐月が素早く続く。どうやら自分は知らないと思われるのは心外だと言いたいようだった。
「白か黒かは半々と言ったところだが、俺の勘では黒だな。この殺戮行動は、行き過ぎている」
「また、鬼憑きですか？」
「またとはなんです？　御自分のことを棚に上げて」
皐月は今にも飛びかかりそうな勢いでアリシアを睨みつけ、それに応じるように彼女も臨戦態勢を取る。
本当に、仲の悪い。九重は重々しい溜息をついて、デスクの横にあるこじんまりとした洋服箪笥に手を掛けた。これに付き合っていては日が暮れる。今日中に事を済ませたいという想いに駆られながらも、ゆっくりとした手付きで着替えを始めた。

躊躇い傷

私が彼女と出会ったのは高校受験の控えた、吐く息が白く染まる真冬の駅だった。

その日は連日続いていた寒気も和らぎ、小春日和と称される程に温かく晴れた日で、普段のように着こんで家を出た私には少々暑いくらいの天気。

そんな中を平時と変わらぬ心持で駅に着いた私は通勤途中の大人たちに紛れて改札をくぐり、ホームの端、一番後ろの車両が止まるであろう定位置で電車が来るのを待とうと人混みを掻き分ける。

なんの変哲もない、平凡な一日の始まり。毎日のように立ち尽くすスペース。この三年間変わらず向かうそこに、普段なら人の姿はなく、それ故にその日は珍しいものだと見かけない少女の姿に心が揺らいだ。

自分がいつも立っている場所で、さも当然とした風で電車を待つ少女。それはそうだ。別にそこが私専用と言う訳でもない。単に今日はそこが私ではなく彼女の場所だっただけの話。

仕方なく私は彼女の後ろに位置取り、電車を待つことにする。

ホーム内には二番ホームに電車が来るとか、終日禁煙だとか、私にはなんの関係もないアナウンスが流れ続ける。それが、僅かに鬱陶しい。煩わしいと思う。

自分には関係の無い情報が、この世界には溢れ返っていることが逆に、私が築き上げたものの矮小さを物語っているようで、毎日のこの時間が嫌いだった。

だからこうやってその音から少しでも離れようと、わざわざ人気のないホームの端を陣取ることにしたというのに。彼女は平然と、私の世界に踏み込んできたような気がして苛立った。　だからと言って因縁をつける気も勇気もない。ただただ彼女の後姿を睨みつけ、観察することで、彼女を私の世界に取り込もうとするばかり。

肩口で切り揃えられた、綺麗な黒髪。今の時代珍しく、後姿からはまるで化粧っ気を感じられない。きっと、この綺麗な黒髪も染めた事など一度もないのだろう。

生憎私は世情に流されやすく、大人に媚を売り、友人の顔色を窺い、一人除け者にされぬように色んな事に手を染めていた。

ふと気になって、自分の赤茶けた髪に手を伸ばす。手入れは欠かさないが、それ以上に痛めつけ、傷んでしまった自分。腰まで届くかのように伸ばした自慢のそれも、今では目の前の少女と同様に肩口までしかない。

だというのに、この敗北感。いや、敗北ではない。恐らくこれはきっと、虚無感。毎日が充実しているようで、てんで空っぽな私は、彼女を見てそれに気付いてしまった。

外っ面は同じでも、中身は正反対。そこまで思って、私はようやく分かった。私は、彼女が羨ましい。

何故かは分からない。今までだって化粧なんかと縁のないボサボサした子は幾らでも見てきた。中にはそれでも可愛いと思える人もいたし、気持ち悪いと貶した人もいる。

けれど、羨ましいと思えたのはこれが初めてだった。

顔も知らない人。知っているのは後姿だけ。私は、その後姿さえも羨ましいと感じてしまっている。

分からない。こんな感情は、知らない。知識はあっても、心は知らない。

そうして時間が経ち、私の立つホームに電車が来ることを知らせるアナウンスが流れる。

その頃には、私の中を渦巻く様々な感情は一様にして、目の前の少女に対する敵意として収束していた。

このまま、軽く背中を押してみようか。

間もなく訪れる電車の急ブレーキの音。騒ぎ立てる大人たち。そうして終わりを告げる私の平凡な一生。

それでも構わない。このまま死んだように生きるよりは、よっぽ

どマシだ。最初は刑務所とはどんなものだろうか、世間はどう見るのだろうか、なんてことを考えていたが、それさえもどうでもよくなってしまった。
このまま、倒れこむようにして線路へと飛び込み、その道連れとして彼女の手を引こう。
一時の気の迷いだったかもしれない。それでもその時の私はどこか追い詰められていて、もう引くことは出来なかった。
何度も逡巡して決心を固めた私は、そっと手を伸ばし、そしてそこで動きを止めた。
ホームの中に木霊する警報音。何事かとあたりを見渡す大人たち。
黄色い線の内側の私と、外側の彼女。
そこが、私たちの境界線。
普段は気にも留めないような電車が通過する風圧が、この空っぽの身体が吹き飛んでしまいそうな程に強く感じた。
生きている。
わからない。
茫然と立ち尽くす私は、こちらを振り向いて微笑む少女の顔に意識を取り戻し、自分の手を見る。
強く、強く少女の腕を握りしめた自分の手。
反射的なものだったのかもしれない。迫りくる死に引け腰になってしまったのかもしれない。けれど、私はこう思いたかった。
私は、自分の意思で境界を超えたのだと。
自ら、生きることに執着したのだと。
「……危ないよ、そんなとこにいたら」
振り絞るようにして、渇いた声を空気と共に吐きだす。それが、精一杯。
そんな私を見て彼女はこの世の物とは思えないほどの、綺麗な微笑みを向けてきた。
「ありがとう」
ただそれだけ。

私は力なく握りしめていた手を離し、彼女から目を離さぬまま一歩後ずさる。
彼女はそれを見て小さく笑うと、まるでその騒動がなかったかのように電車のドアをくぐり、窓越しにこちらを見つめたまま去っていた。
それから私はというと、事情を聞きに来た警備か何かの人たちに事の顛末を細かく説明し、十分程の時間を無為にしただけですべては済んでしまった。
次に電車が来るにはまだ時間がある。学校も、今からでは確実に間に合わないだろう。
仕方なく駅員さんに事情を話し、気分が悪くなったので帰ることにしたからと切符を払い戻してもらい、大人しく家に帰ることにした。
あの、少女の顔が頭から離れなかったのだ。
それは、あんなことがあったのだから無理もないかもしれない。
それでも、それだけで済まない程に私は自分がおかしいことが分かっていた。
彼女の色が薄れない。黒い、玄い、あの美しい彼女。
それが忘れられなくて、私はその後も駅で彼女の姿を捜し続けたが、あの黒が見つかることはなかった。
それだけが、壊れてしまった今となっての、最後の心残りだった。

1

容赦なく照り付ける日差しの中、九重は手に持った用紙に目を遣りながら公道に抜ける道を歩いていた。正確には獣道と呼んだ方が正しいという程に荒れた森の切れ目。もっとマシな経路はいくらでもあるが、屋敷からの最短という観点から言えばここ以上の道はない為、九重は基本この道を常用していた。

時折張りだした枝葉を鬱陶しそうに払い除けながら進む九重の足取りに躊躇の類は存在せず、だいぶ離れた場所で慌てながら追い掛けて来るアリシアだけが時々奇声を上げながら激しい音を立てていた。

「九重さーん、待って下さいよぅ！」

すいすいと先へ進んで行ってしまう九重を恨めしそうに睨みながら、アリシアはスカートに付いた土埃を払って追跡を続行する。最初は一緒に街に行くことが目的だったというのに、今ではこの有り様。一緒どころか置いて行かれないように着いて行くだけで精一杯である。正直、ここで逸れてしまったら一人寂しく九重の帰りを待つか、遭難するかの二択しかない。

それだけは勘弁と息を荒げて地面から浮き出た木の根を踏み台に、走るというよりは跳ぶように獣道を進み続ける。

そうやって十分ほど追い掛けると、アスファルトの地面と何かの標識が目に付いた。よいしょ、と一メートル程の段差を飛び降りて標識を見ると書かれているのは“熊注意”の三文字。無事に森を出れたことに安堵しつつ、よくよく考えて諸悪の原因たる九重の存在を思い出し沸々と怒りが込み上げてきた。

しかし辺りを見回すも九重の姿は在らず、行き場を失った怒りに地団駄を踏み気分転換を図る。なんとなく興味本位で試してみた地団駄だったが、意外と鬱憤は晴れたのでこれは新発見と感心しながら、アリシアは街のある方角へと歩き始める。

俗に言う田舎町であるここ矢尻市は、その機能の殆んどが駅のある中央部に密集している。その外周を沿うようにして住宅街が存在し、さらにその外周に僅かながらの工業地帯（もっともあるのは寂れたボロ工場だったり放置されっ放しの廃工場ばかりと、名ばかりの工業地帯である）。そこを東に抜ければそのまま隣街、南は海、北に抜ければ川にぶつかり、そこに架かる大橋が見える。そして西に抜ければ巷で噂の魔女の棲む館が存在する郊外の森がある。

ようするに今アリシアのいる西部の森から街に行くには、工場地帯と住宅街を抜けなければならないのだが、そこはさすがの田舎町。土地が余っているものだからその距離はとてつもなく遠く、歩いていては半日は掛かってしまう程である。

屋敷の買い出しも担当する皐月は何やら特殊な方法で移動しているらしいが、含み笑いを漏らすだけでその方法を教えてはくれない。一方の九重ときたら、まず第一に屋敷から出ることが殆んどない。珍しく出掛けて行ったと思ったら僅か数十分足らずで帰って来たり、酷い時はものの数分で帰って来たりと、とにかく屋敷を出ない。とんだ引き篭もりであるが、部屋が部屋なので顔色はすこぶる健康そうなのが中途半端である。

そんな九重がどういう手段で街に移動しているのか、残念ながらアリシアには想像も出来ない。こんな郊外では偶々タクシーが通ることもある筈がなく、結局は歩くしかないのだ。屋敷に戻りたくてもここがどこだかが分からないのでは戻りようがない。途中見たことのある場所に出ればそのまま屋敷へ、出なければ街に着いてからタクシーでも拾うしかない。

「せっかくデート出来たかも知れないのになぁ」

諦めにも似た情けない声を出しながら、アリシアは偶に通り過ぎる大型のトラックを横目にとぼとぼと公道を歩き続けた。

一方その頃、件の九重本人は絡まれていた。

獣道を抜けた先の公道を北に向かって暫く歩くと、市内はおろか

県内でも有名、東日本でも有数のお嬢様学校“銀聖女学院”（一応共学らしく、正式には銀聖学院女子部というらしいが、男子と女子は完全に隔離され、校舎のある敷地も離れている為地元では分けて数えられている）がある。

九重は学院の院長と面識があり、きちんと整備された道がないため車などを乗り入れられない屋敷の現状を説明して敷地の一角に車やバイクを置かせてもらっていた。この場所にアリシアを連れてくると色々と問題がある為、先に一人で足を取って彼女が公道に出た頃には戻っているつもりだったが、そう上手く事は運ばなかった。

無駄に厳めしい校門を潜って顔馴染みの警備員に頭を下げたところで、その“色々な問題”の原因がやって来てしまったのである。

「哉々！　また私に挨拶もせずに出て行こうと考えていましたでしょう？　お生憎様、今までの失態を教訓に手は打って置きましたの」

九重は横目にチラッと今しがた挨拶を済ませた警備員を見て舌を打つ。当の本人はいやぁ、すみませんねぇ、と気まずそうに後頭部を掻いて目を泳がせていた。

「はぁ、面倒な」

眼前に仁王立つ問題の少女には目もくれず、九重は気だるそうに携帯を取り出して登録してある番号を呼び出しコールする。その行為に少女は何やら御立腹のように騒いでいたが、それには全くの無反応で相手が出るのを待つ。

そして数回のコールの後、自宅で待機中の皐月が電話に応答した。

「あぁ、もしもし？　俺だけど、残念なことに瑞樹に捕まった。よって、アリシアを頼む。具体的に言うと、街の駅前広場辺りまで」

『了解しました。主様は？』

「おまえと瑞樹じゃ相性が悪いから、この場は俺一人で乗り切る。それじゃよろしく」

用件を簡潔に済ませ、皐月の返事も待たず携帯を切りポケットに仕舞う。通話代も馬鹿にならないのだ。基本的に九重家は貧乏なので、節約は欠かさない。

「それで瑞樹、俺は忙しいんだ。ちびっ子に構ってる暇はない」
未だ文句を漏らし続ける少女、瑞樹の頭をポンポンと叩き、僅かに屈んで目線を合わせてやる。
「本当におまえは失礼極まりないな。年頃の女性にちびっ子とは何事だ！」
瑞樹は自分の矮躯を少しでも大きく見せようと胸を張って見せるが、それがますます子供っぽい。
「だいたいな、宗家の跡取りである私に大して分家のおまえがそんな態度、どう考えてもおかしいだろう！」
「はいはいお嬢様。残念ながら俺はその宗家やら分家やらといったことは三年前に初めて知ったんだ。そういう立場的な意識は皆無なんだから、今更改まったりは出来ねぇよ」
「む、それは分かってはいる。そもそもおまえの父哉人（かなひと）が死んだ時点で私と哉々の関係は途絶えたようなものだ。しかし哉々、それとこれとは関係なしにおまえの態度は酷過ぎる。いや、鬼畜過ぎる。それが元婚約者への態度なのか！？」
瑞樹は人目憚らずそう怒鳴り付け、しまったと思った時には周囲からいい所のお嬢様方がひそひそと何やら良からぬ妄想の話に花を咲かせてしまっていた。
仕方なく九重は場所を移すことにして、瑞樹の手を取って件の駐車場まで引っ張って行き手近なベンチに腰を下ろした。
「あんまり大声で叫ぶようなことじゃないぞ、瑞樹。おまえももう高校生なんだから、大人になれよ」
「高校も出てないような奴に言われたくはないわ」
もっともである。九重は中学卒業後進学はせず、家族の死を機にもと住んでいた家を売り払い今の屋敷に移った。それからというものの、とある目的の片手間に“仕事”をこなし、それ以外は自室で寝ているのが殆んどである。正確に言うならば、寝ているしかない。
それは、なんてことはない、事故の後遺症だった。
自分の興味本位で巻き込まれた事件に家族を巻き込み、最愛の妹

さえも失ってしまった。それきり、九重は一日の大半を悪夢に苛まれている。そして、その長い髪さえも代償行為。なくなってしまったものを忘れない為の、自身への戒め。

「ごめんなさい、少し言い過ぎたわ」

さっきまでとは打って変わって大人しくなった瑞樹が、済まなそうな表情で九重を見つめる。「謝ることはない、事実は事実だ。瑞樹が気にすることはない」

「それでも、ごめんなさい。九重の血が、哉々を苦しめる。本来私が背負うべきものを、哉々に背負わせてしまっている」

これだから、瑞樹に会うのは嫌だった。

割と歳の近い親戚。それが最初の出会い。

九重の血は旧家の血。九重の業は鬼の業。

起源は未知。未だ知らぬを源流とする九重の家系は、知ることに特化した家系である。

故にその責は知識の収集・貯蔵であり、その膨大な知は時折邪なものを惹き寄せた。

本来関係性が薄れた分家は邪から狙われることはまずないが、唯一の例外が存在する。それが宗家の跡取りとの婚約。血の薄れを防ぐ為、宗家は幾つかの分家から配偶者を選ぶ。要するに、宗家との関係性が強まる為、分家までが狙いの対象にされてしまう事がある。

そして運悪く、今代選ばれたのが九重　哉々――

結果は悲惨なものだった。中学卒業を控えた二月の寒空の下、九重の家族は原形を留めぬほどに殺し尽くされ、当の本人も瀕死の重傷を負い丸々一ヶ月目を覚ますことはなかった。

結局、目覚めた九重に残されていたのは悲劇の傷跡と、その渦中にいた人物、天崎　朱音。そして己が巻き込まれたものの原因と、己が巻き込んだ結果だけだった。

だから、瑞樹は苦手だった。自分と同じ場所に立つ彼女もまた、同じような目に合うことがないとも言い切れない。そんな脆さ。傷だらけの自分たちは、どちらかを支えようとすればどちらかが崩れ

てしまうのは明白だった。
「俺が背負いたくて背負ってるんだ、おまえには関係ない。それに、どう抗ったところで俺の本質は変わらないみたいでな。猫どころか人まで殺しそうだよ」
「物騒なことは言わないの」
こちらを気遣ってか、少しばかり調子を取り戻した瑞樹が呆れながら肩をすくめる。
「諺だよ、諺。とにかく、今の俺は九重とは関係なしに動いているんだ。おまえは気にするな」
ベンチから立ち上がり、通り際に瑞樹の頭を撫でてから止めてあるバイクに跨る。盗まれることもないので鍵は付けっ放しだった。
「ねぇ哉々」
鍵を回し、エンジンの調子を確かめている九重に向かって瑞樹が小さな紙切れを投げ渡す。
「私は今でも、あなたのことが好きよ」
それだけ言って、瑞樹は九重に背を向けて学院の校舎に向かって歩き出す。そろそろ休憩時間も終るのだろうか、同じように校舎へ歩く生徒の姿がちらほら見えた。
「まぁ、暇があったら屋敷に遊びにでも来い。自慢のメイドがもてなすから」
本格的にエンジンを掛け、勢い良くスタンドを蹴り学院の校門へ向かってバイクを走らせる。ヘルメットは先程の警備員に預けてあるので、そこまではこのまま行くしかない。学院の先生方に見つかることがないよう祈りながら、九重は振り返りもせず駐車場を飛び出した。
「どうか、怪我をしないように気を付けて」
そう呟き、瑞樹は鐘のなる校舎へと掛け足で戻って行った。

2

昼間だというのにカーテンは締め切られ、部屋には淀んだ空気が充満していた。

何度か立ち上がって換気しようにも、隣のソファに腰掛けたまま恨みがましい視線を向けるアリシアを前にしては行動を起こす気にならず、九重はただ黙々と自分に宛がわれたティカップに口を付けるだけだった。

この部屋の主はお茶だけ出すと「所用があるからちょっと待っててね」と茶目っ気たっぷりに言い放った後、もう一時間ほど帰って来ていない。そろそろ帰ろうかと内心タイミングを計ってはいたが、目的が目的の為自分の用事をすっぽかして帰るわけにもいかず、現在こうしてむくれたアリシアを横にしかめっ面をしている訳である。

することもないので何となしに部屋を眺めたりはしているものの、いかんせんこの部屋は雑多過ぎる上に置かれているものは大いに奇天烈な物ばかりでその用途さえ分からないのが大半である。片隅には何体かの作りかけの人形がほったらかしにされてはいるが、工房ではなくこの事務所に置いてあるということは恐らく完成させるつもりはないのだろう。

そのうちの一つは以前傑作の予感とかなんとか言われて、真夜中の工房まで見に行かされた記憶が新しいので少し意外だった。とは言っても似たようなことは多々あるので、最近では、と枕につけなくてはならないが。

どうにもあの人形師は飽きっぽい性質らしく、腕は一流どころか超一流だというのにその人形を買える人間は非常に少ない。完成品の絶対数が少ないのだからやむを得ないことなのだろうが、それ以上に本人が売り出そうとしないのだからしようがない。売りに出す前に飽きてしまった人形は廃棄するか、近所の子供やら爺様婆様にあげてしまうのだ。おかげで事務所は年中火の車だというのだから、

格好も糞もない。
けれど。それでも彼女はいつまでもそうやって生きていくことを九重は知っている。知ってしまった。
何かに執着してしまえば身動きが取れなくなるから。
大事な時に、大切なものを取り落してしまうから。
結局、彼女は手ぶらでいろんなものを守り続け、自分は郊外の館で一人、ひとつのものを守り続けるのだろう。
傷つけて、傷つけられて。
最後には自身の手で、忘れないように楔を打つ。
並べられた人形の中に佇む、自分によく似た人形（ヒトガタ）。
自分が殺めてしまった半身を弔うためにも、今回の事件にはこの手で片を付けなくてはならない。
そうして部屋を見渡していき、ちょうど壁に掛けられた年季の入った古時計に目が行ったところで扉に掛けられた鈴が主の帰還を高らかに告げた。
「たっだいまーって、なんだなんだぁ？　まだアリシアちゃんと喧嘩しているのかな？」
ほれ茶菓子、と近くのスーパーで買ってきたのであろうお徳用煎餅の袋を無造作に応接机の上に放り出し、ここの主、天崎（アマザキ）　朱音（アカネ）は盛大に胸を張り、ダメでしょ仲良くしなきゃ、なんてことを言い放つ。
「だってだって朱音さん、九重さんったら酷いんですよ！　私を一人あんな郊外の館から歩かせといて自分はすいーってバイクで街まで来て、『なんだアリス、遅いじゃないか』なんて言ったんですよこの人は！」
アリシアは感情の昂ぶりに合わせて段々と腰を浮かせていき、終いには朱音に掴み掛る勢いで声を上げる。
「だから、何度も説明しただろう。俺はちゃんと皐月に頼んだんだ。俺は瑞樹と話していて遅くなったから、てっきりおまえはもう着いてると思ってたんだよ」

「へぇ、私が必死に歩いている最中に、九重さんは幼女と楽しそうに戯れていたんですね？」「おまっ、それじゃあ俺が変態のように聞こえるだろう！」

「事実ですから。九重さんはどうせ幼女好みだから私には冷たく当たり、瑞樹ちゃんにはやっさしいんですよね」

もうどうにもこうにも無理だった。完全に臍を曲げてしまったアリシアを前になす術はなく、胸を張ったまま固まっている朱音に助け船を求めるも敢え無く終わり。結局、アリシアの機嫌を損ねたままでは仕事にならない為、彼女の機嫌取りに九重の財布からは諭吉が二人も消え去ってしまった。

2（後書き）

本当に久しぶりで。今回はかなり短いですが、次回からやっと本筋に入ります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6099o/

アルカイド・クラッチ　――引き篭もり猟犬――

2011年3月22日02時40分発行